

「マゲと龍」

—初稿—

2025/6/15

雨森 れに

〈人物表〉

文吉	(24)	腕のいい床屋。絵が趣味
治三郎	(22)	文吉の友人。卸問屋の息子
宗助	(30)	常連宗助

1. 江戸の街並み（昼）

空は秋晴れ。火災跡の瓦礫を片付けをする町人たちが忙しそうにしている。
急ぎ足で辻を曲がる治三郎（22）。
手には丸めた紙を持っている。

2. 長屋・外観（昼）

火災跡から離れた、長屋が並ぶ場所。そのうちの棟、端の部屋の戸口に「髪結」と書いた暖簾。文字の周りにはぐねぐねとした太い線が数本書いてある。
治三郎が暖簾をくぐる。

3. 床屋・室内（昼）

土間と六畳ばかりの小上がりがある。
きらりと光る剃刀を手にしている文吉（24）。
髪をおろしている宗助（30）。小上がりから土間に足をおろし、じっとしている。
剃られた髪がはらはらと落ちていく。

治三郎が入ってくる。

治三郎「ブンさん、今度はここでやってんのかい」

文吉「うっせえな。今話しかけんな」

文吉は素早く剃刀を動かす。

宗助は満足げに微笑んでいる。

宗助「やっぱ腕がいいねえ」

治三郎「ブンさんが燃えなくてよかったよ」

文吉が鼻を鳴らす。

いつの間にか綺麗な細マゲができている。

文吉「おめえらが嗅ぎつけてくるから絵が描けねえ」

宗助「絵？ あんたに絵心なんかあったかね」

文吉が小上がりの奥を指さす。

文机の上に紙が乗っているが、肝心の絵は何が描かれているのかわからない。太い曲線が数本あるだけ。

宗助「ほー。筆運びの練習中ってことだな」

治三郎「いや。たぶんアレ……龍とか言い出すと思うよ」

宗助 「は？」

文吉 「（満足そうに）治三郎は目利きになれらあ」

治三郎 「そうだろう？ その上、親切ってわけ。ほらよ」

治三郎が丸めた紙を渡す。

文吉が広げる。

文吉 「こりや、地獄絵……の祭りかあ？」

宗助がのぞき込む。

宗助 「ああ、津軽のほうの」

治三郎 「そうそう。津軽の祭りは二種類あつてよ。ね『ぶ』たがお伽話で、ね『ぶ』たが地獄絵なんだって」

宗助 「へえ。お前さん、なかなか物知りだね」

文吉 「これが何で親切なんだよ」

治三郎、文吉を見てニカッと笑う。

治三郎 「ブンさん、津軽で絵師やらねえか」

4.

居酒屋・店内（夜）

一般的な居酒屋（テーブルなどではなく、大人三人座れるようなベンチが並んでいる）。

文吉と治三郎は、田楽を着に熱燗を飲んでいる。

文吉 「んで、なんだって」

治三郎 「俺と津軽行こうって話だよ」

文吉 「お前と一緒にとは聞いてねえな」

治三郎 「ブンさんは絵の勉強になる。俺は婿入り話から逃げられる。どうだ、いい話じゃねえか」

文吉 「俺をダシにしようってんだな」

治三郎 「まあまあ。こっちの話は一旦置いて。正直、興味あるだろう？ そうだろう？」

文吉、酒を煽って、

文吉 「あるね。でも俺は地獄絵を描きたいわけじゃねえんだよ。北斎みたいな風景をだな……」

治三郎が酒を注ぐ。

治三郎 「北斎だって、この前、四谷怪談の出したじゃねえか」

文吉 「幽霊と地獄は違うだろが」

治三郎 「どっちも死んだ後のことさ。それに」

文吉 「それに？」

治三郎 「津軽までの景色も書けるぞ」

文吉がぐくりと唾を飲み込む。

治三郎はしたり顔になる。

治三郎 「行くとしたら今か、雪解けすぐか。いずれにしろ、あつちは雪が深い」

治三郎が酒を飲む。

文吉は視線を落とし、床を見る。

戸の開く音。風と一緒に入ってきた落ち葉が文吉の足に当たる。

治三郎が肩をすくめる。

治三郎 「さみいな」

女将 「いらっしやい」

客 「おう。今日はいつもより熱くしてくれ」

文吉、視線を落としたままで、

文吉 「津軽まで、どんだけかかる」

治三郎 「大体半月。絵描きながら行くならひと月みてもいいぞ」

文吉は思わず顔をあげる。

文吉 「金は」

治三郎は袂から財布を見せて、

治三郎 「卸問屋の俺にいうことか？」

文吉 「（苦笑気味に）そりゃいいな」

文吉がゆっくりと目を閉じる。

文吉 「わりいけど、考えさせてくれ」

治三郎 「あいよ。でも、俺は信じてるからな」

治三郎が女将を呼び止め、追加の酒を注文する。

文吉は空のぐい飲みを見つめている。周囲の音など耳に入らないかのように。

5.

床屋・室内（昼）

客はおらず、宗助が遊びに来ている。

文吉と宗助で将棋を指している。

文吉は何かに急かされてるような指し方。

宗助、それを諫めるように、

宗助 「ブンさん、いくのかい」

文吉 「あ？ 王手するに決まってんだろ」

文吉が駒を置く。

宗助は非難めいた声をあげる。

宗助 「そうじゃないって！ ああもう」

文吉 「今日はもうやめだ。帰りな」

文吉が文机の前に移動する。

絵を描くために墨をすり始める。

宗助は文吉の背中を見てため息。

だが、帰らない。

墨をする音が止まる。

文吉 「悩んでる」

文吉は振り返らない。

宗助が言葉を探す間に、墨すりが再開される。

忙しなく、まるで墨の中に答えを探すかのように。

宗助 「俺のマゲはブンさんにしか任せらんないんだよ。そうい

う奴、いっぺえいるだろ」

文吉 「じゃあ俺の才能はどうなんだよ」

宗助 「ブンさんの才能は、髪結いだって」

文吉の指に力が入る。

宗助 「だから店がなくなってもブンさんを探すんじゃないか」

文吉 「今日みたいなのも珍しいな」

文吉が店の戸口を見る。

宗助 「常連には新しい場所教えてもよかったんじゃないのかい」

文吉 「いや、今しかできねえんだ」

文吉が立ち上がり、押し入れから大きな紙を出す。

足で宗助を追い払い、紙を敷く。

畳三畳分もあるかという大きさである。

宗助 「これ、どうしたんだい」

文吉 「治三郎んとこのだよ」

文吉がすりこぎほどの筆を取り出す。

たっぷりとすった墨を吸い込ませ、一筆。また一筆

と続いていく。

荒々しいが、迷いが無い。

額に汗を浮かべつつ、筆を動かす文吉。

宗助はしばらく見ていたが、みるみる驚きの表情に変わっていく。

文吉がにやりと笑い、動きを止める。

宗助 「こりゃあ……ブンさん、なんで」

文吉 「俺はな。チマチマしたことが嫌いなんだよ」

文吉、最後の一筆を入れる。

宗助 「空に昇っていきそうじゃないか」

文吉が得意げに鼻をこする。

文吉 「マゲよりいいだろ」

文吉は鼻に墨をつけたまま笑みを浮かべる。

宗助もつられて笑みを浮かべる。

宗助 「たしかに。（月代を叩いて）俺の頭には向かないな」

文吉 「でもな。あっちでも受け入れてくれるかわからねえだろ」

宗助 「そしたら俺が、いやこの町が待っててやるからさ」

宗助が文吉の胸を拳で叩く。

宗助 「いってきな」

文吉が大きく息を吸い込む。

何かを言おうとしてやめる。

真剣な表情で、ゆっくりと頷く。

× × ×

文吉と宗助がいなくなった部屋。

小上がりには手入れしてある髪結い道具がある。

その奥には先ほどの絵がある。

黒一色で描かれた荒々しい龍。

今にも昇っていきそうな迫力である。

おわり